

都市の水辺を活用した小学校における環境教育に関する研究
 ～東京都江戸川区を対象として～

Research on Environmental Education in Elementary School Utilizing the Waterfront of the City
 -A Case Study of Edogawa-ward, Tokyo-

○津端里佳¹, 畔柳昭雄², 坪井塑太郎³

*Rika Tsubata¹, Akio Kuroyanagi², Sotaro Tsuboi³

Abstract: This study, in order to obtain the knowledge to develop waterfront environment in the future, it is intended to perceive the current state of school education in the waterside in Edogawa-ward, Tokyo. From the survey results, the most activity has had been made, it is water within the school. Furthermore, it was found that wading, an activity to contact with water, most. Then many activities had been carried out is a river, it was found that most non-water contact activities such as walking and vegetation observation. In addition, as an evaluation of the water as a place of education, was pointed out on the plus side is a natural element such as green. In the negative side, was noted for risk of water accident.

1. はじめに

近年、都市内を流下する河川・水路などの水辺は、都市の中に残された数少ない自然であり、その重要性が再認識されるようになってきた。中でも、東京都江戸川区では、1973年に全国に先駆けて親水公園の第一号となる古川親水公園が開園された。以来、江戸川区には5ヶ所の親水公園、18ヶ所の親水緑道が整備されることで、広く住民に利用されている。

また、こうした水辺は地域の自然のしくみを子供たちに教える環境教育の場として、国や地方自治体、市民団体、学校により活用されてきている。本研究対象地域である江戸川区においても、多くの環境教育についての施策が検討されてきた。また、子供にとって身近な自然との係わりは、生活のための基礎的な能力を獲得するだけでなく、自然環境に対する愛着や保護意識を身に付けていく上で重要と言われている。^{[1][2]}

そこで本研究では、都市の水辺が学校教育に与える影響を把握するために、東京都江戸川区における水辺を活用した学校教育の現状を捉え、今後の水辺環境整備に対する知見を得ることを目的とする。

2. 調査概要

調査概要を Figure 1 に示し、調査項目を Table 1 に示す。尚、本稿では調査項目を掲載内容に沿って限定している。

本調査では東京都江戸川区内の区立小学校 73 校を対象に、アンケート調査を実施し、現在の学校教育における水辺の活用状況を把握した。

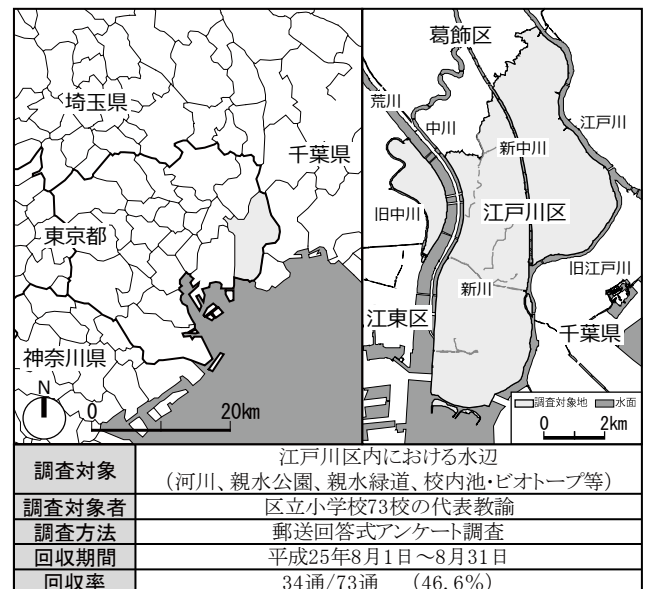


Figure 1.Outline of Study

Table 1.Questionnaire Item

項目	概要	回答方法
学校での取組	利用している水辺の場所	選択
	校内にある水辺について	選択・記述
各学年での取組	各学年の活動内容	選択・記述
授業について	水辺の良い点・悪い点	選択
	今後の水辺環境整備に望むこと	選択

3. 小学校における取組みについて

3. 1. 活動場所

各活動場所における学年ごとの接水活動、非接水活動の内訳を Figure 2 に示す。

各活動場所における接水・非接水活動を見ると、接水活動が最も多く行われているのは、学校内の水辺

1 : 日大理工・学部・海建 Nihon Univ. 2 : 日大理工・教員・海建 Prof, CST, Nihon Univ, Dr.Eng

3 : 日大理工・教員・海建 Associate Prof, CST, Nihon Univ, Ph.D

(池やビオトープ)であることが分かる。また、非接水活動については、河川が最も多いことが分かる。

さらに、学年ごとの内訳を見ると、接水活動は3年生が最も多く、次いで、4、5年生においても半数以上が接水活動を行っていることが分かる。

3. 2. 水辺での活動内容

各水辺で行われる活動内容を Figure 3 に示す。

Figure 3 を見ると、親水公園は散策や植生観察の場として活用されており、親水緑道では清掃活動が多く行われていることが分かる。また、河川では他の水辺と比べ、散策や昆虫採集、植生観察の場等、多様な活動が行われていることが分かる。公園は他と比べて活動は少なく、散策、昆虫採集、植生観察が僅かに行われている。校内の水辺では、水遊びや植生観察、昆虫採集等、多様な活動が行われている。

以上より、水辺での活動内容には場所ごとに差異が見られるが、共通して植生観察の場として活用されていることが分かる。特に河川の場合、植生観察が他の水辺の2倍以上行われていた。これは河川は他の場所と比較して、広い河川敷があることと緑地が多く生息していることに起因しているためと考えられる。また、水遊びは校内の水辺で行われていることが多く、これは、安全性や衛生面が確保された一番身近な場所であることに起因していると考えられる。

4. 教育の場としての水辺の評価

教育の場としての水辺の評価を Figure 4 に示す。

良い点として指摘された多くの項目は、緑量、景観、の近さ(水難事故の危険)、治安(不審者、ホームレス)、交通安全性(車や自転車事故)に対して指摘が多い。また、水との近さの項目において、良い点は水に近づくことが出来るとされているが、反面、水難事故に対する危険性が懸念されており、水辺の持つ良い面と悪い面が指摘されている。

5. おわりに

本研究では、東京都江戸川区の小学校の73校で行われている水辺を活用した環境教育の授業の現状について場所や学年について明らかにしてきた。

今後は、各学校の立地場所や環境教育の授業の内容などを踏まえ、学校教育に対する水辺の役割や効果を把握することで子供の情操教育に対する水辺環境整備のあり方を捉えていくことが課題である。

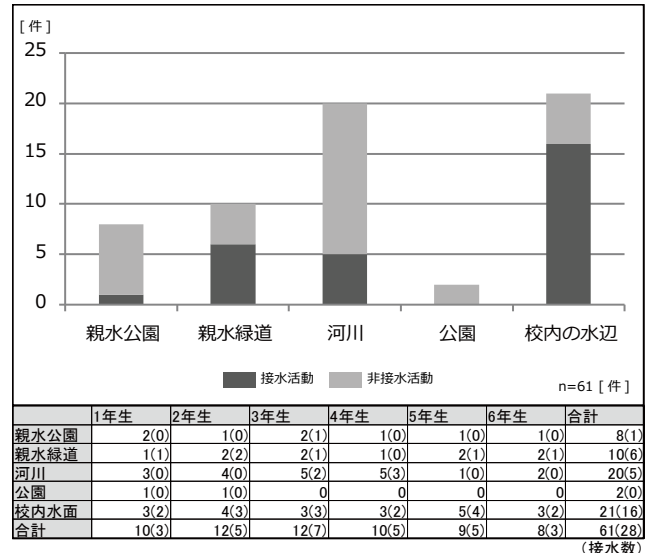


Figure 2. Water Contact Activities by Location

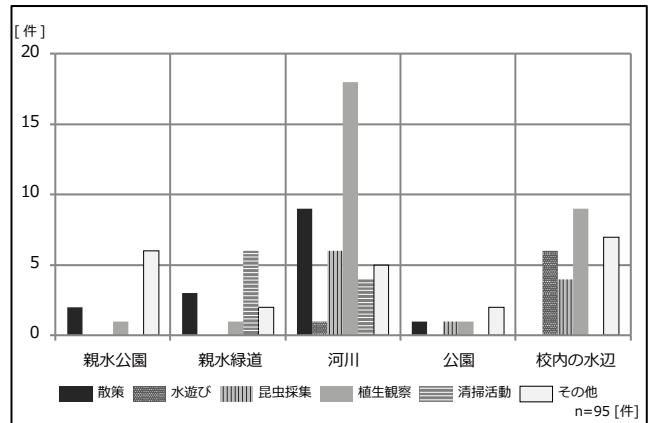


Figure 3. Activities in the Water

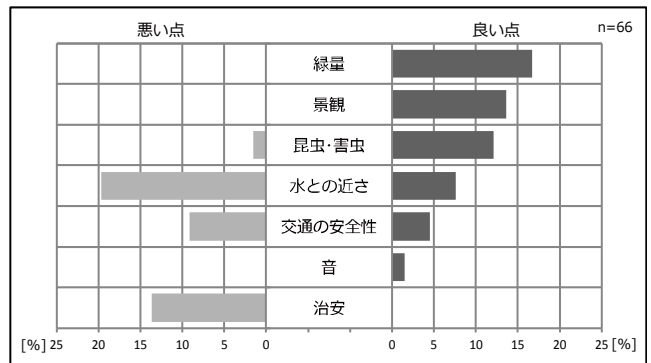


Figure 4. Evaluation of Water

6. 参考文献

[1] 小林誠, 畔柳昭雄: 「子供の河川空間との係わり方から捉えた空間認識に関する研究」, 環境情報科学論文集, No.15, pp.203, 2001 年

[2] 畔柳昭雄, 田中郁臣: 「都市小河川の環境整備が行政・住民・小学校に及ぼす影響と三者の役割—水辺環境整備が子供の水辺との係わりに及ぼす影響に関する研究 その1—」, 日本建築学会計画系論文集, 第 553 号, pp.253-260, 2002